

2025年9月28日 聖霊降臨後第16主日 「金持ちとラザロ」

日課 : アモス6:1,4-7／1テモテ6:6-19／ルカ16:19-31

1. イエスさまの語られたたとえ

先週の「不正な管理人のたとえ」に続いて、今週は「金持ちとラザロのたとえ」です。その間には「律法と神の国」という言葉が挟まれています。

「あなたがたは、神と富とに仕えることはできない」

このイエスさまの言葉を聞いたとき、金銭に執着していたファリサイ派の人々は、イエスさまを嘲り笑いました（ルカ16:14）。

当時の人々は「富や健康は神の祝福のしるし、貧しさや病は不信心の結果」と考えていました。けれどイエスさまは、この考えをはっきり否定されます。

「人々の間で尊ばれるものは、神には忌み嫌われるものだ」（ルカ16:15）。

主は、私たちの心を神がご存知であると告げ、悔い改めを求められます。

2. 名もなき金持ちと、名を与えられたラザロ

たとえに出てくる金持ちは、毎日ぜいたくに暮らしていました。その門前には、病気で貧しいラザロが横たわり、食卓から落ちるもので腹を満たしたいと願っていました。「腹を満たす」という言葉には、動物に“えさを与える”とい

う意味です。人々にとってラザロは、人間として尊重される存在ではなかったのです。

けれど彼は名前を持っていました。イエスさまの語られた数々のたとえの中で、登場人物に名前が与えられているのは、このラザロひとりだけなのです。

「ラザロ」とは「神が助けてくださる」という意味の名でした。

イエスさまは「名もなき金持ち」と「名前を与えられた貧しい人」を対比させ、死後には立場が逆転することを示されました。神は小さき者たちを決して見捨てずに、必ず覚えておられるのです。

3. 現代の「門前のラザロ」

今日の社会にも、私たちの門前にラザロがいます。国境を越えられず飢えや寒さに苦しむ移民、戦火のガザで住まいを失い、水や食料にさえ困る人びと。彼らの叫びは、ラザロのただれた傷のようです。世界が無関心のまま「宴」を続けるなら、その苦しみは深まるばかりです。イエスさまは「無関心を破れ」と私たちに迫っておられます。

4. 愛ある寛容を生きる

愛とは門を閉ざすことではなく、門を開くこと。寛容とは持っているものを分

かち合うこと。政府に対しては、人権を尊重し、弱い立場の人を守る政策を求め続けること。社会に対しては、恐れではなく信頼に基づいた共生を築くこと。教会に対しては、食卓を開き、パンを裂き、共に生きる群れであることを忘れないこと。「愛ある寛容」は遠い理想ではなく、日々の小さな実践です。手を伸ばすこと、声をかけること、分かち合うこと。ラザロが名を持っていたように、私たちの周囲の一人ひとりも神に覚えられている存在です。

5. 結び

富を誇るのではなく、愛をもって門を開き、寛容をもって共に生きる時、神の国の光はこの厳しい現実の中にも輝き始めます。絶望のただ中で、私たちは互いに愛し合う群れとして歩んでいきましょう。 _